

サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）
—戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その6—

9. 建築歴史・意匠— 2. 日本近代建築史

南洋群島 南洋興発 社宅
実測調査 標準設計 保存

正会員 ○ 辻原万規彦^{*1}

同 今村仁美^{*2}

同 香川治美^{*3}

1. はじめに

一連の本研究は、戦前期の南方諸地域を対象として、1) そこで行われた日本人による建築活動の実態、2) 当時用いられた室内環境調整手法の実態、3) 戦前期日本の「南方進出」の技術的側面、特に建築活動の側面、を明らかにすることを目的としている^{注1)}。

筆者らは、これまでに戦前期の南洋群島における建築組織¹⁾や建築物の床下の構造²⁾ならびに建築技術の伝播³⁾についてのほか、ヤップ島⁴⁾に現存する建築物について報告してきた。

これらに続いて、本報では、2001年7月と2002年4月に行った現地調査の結果を基に、北マリアナ諸島サイパン島チャランカノア地区における日本委任統治時代の建築物の残存状況を報告すると共に、そのうちの幾つかの建築物の実測調査の結果を報告することを目的とする。なお次報では、テニアン島サンホセ地区を対象として報告する⁵⁾。

本報と次報に関連する研究として、チャランカノアやサンホセなどを対象に航空写真と聞き取りから再現した地図により都市構造を検討した小野らの研究⁶⁾がある。

なお本報では、当時の用語や呼称をそのまま用いた。

2. サイパン・チャランカノアに残る日本委任統治時代の建築物

日本が南洋群島を委任統治するために1922（大正11）年に設置した南洋庁には、地方行政のために、パラオ、サイパン、ヤップ、トラック、ポナペならびにヤルートの各支庁が設けられていた。このうち北マリアナ諸島のサイパン島には、サイパン支庁が置かれていた⁷⁾。

サイパン支庁が置かれていたのは、サイパン島のガラパン地区であり、その約6km南のチャランカノア地区には、南洋群島で当時最大の企業であった南洋興発株式会社の本店や工場などが集まっていた。本店は戦時中に

パラオに移されるが、同社創業直後から約20年間はチャランカノアに置かれていた。また、チャランカノアの工場は同社初の製糖工場であり、後にテニアンやロタにも建設されたものの、主力工場の一つであり続けた。

図1は、1983年現在の地図⁸⁾を基に、1944（昭和19）年頃の復元地図⁹⁾、日本委任統治時代の街並みなどが写された数多くの写真、ならびに2001年7月と2002年4月に行った現地調査結果および聞き取り調査結果などを用いて作成した。ただし、地図は未だ完全なものではなく、地図に挙げたもののほかにも、数多くの建築物などが残っていると考えられる。

3. 南洋興発の社宅群

3.1 常務社宅

図2に、旧南洋興発常務社宅の現況平面図、立面図ならびに写真を示す。建物の前面部分は比較的原型を保っている。曲線状の玄関が特徴的であり、玄関に入って左の部屋は応接室として使われていたと考えられる。一方、背後の部分は部分的に壁が残っているのみである。

この旧常務社宅は、1932（昭和7）年発行の写真集¹⁰⁾に「常務取締役社宅」として掲載されている。また南洋興発の製糖事業が軌道に乗ったのは、操業後3年目（1925（大正14）年）以降のことである。したがって、建設年代は、1925（大正14）年以降1932（昭和7）年以前であると考えられる。しかし建設当時の事情や設計者などに関する資料は現在のところ未見であり、今後の検討課題である。

3.2 二戸建て社宅と四戸建て社宅

図3と図4に、それぞれ旧南洋興発二戸建て社宅と四戸建て社宅の現況平面図、立面図を示す。また図3と図4中には、アジア会館アジア・太平洋資料室所蔵の設計図面¹⁾注2)『現業員社宅乙貳戸建設設計圖』と『人夫宿舍

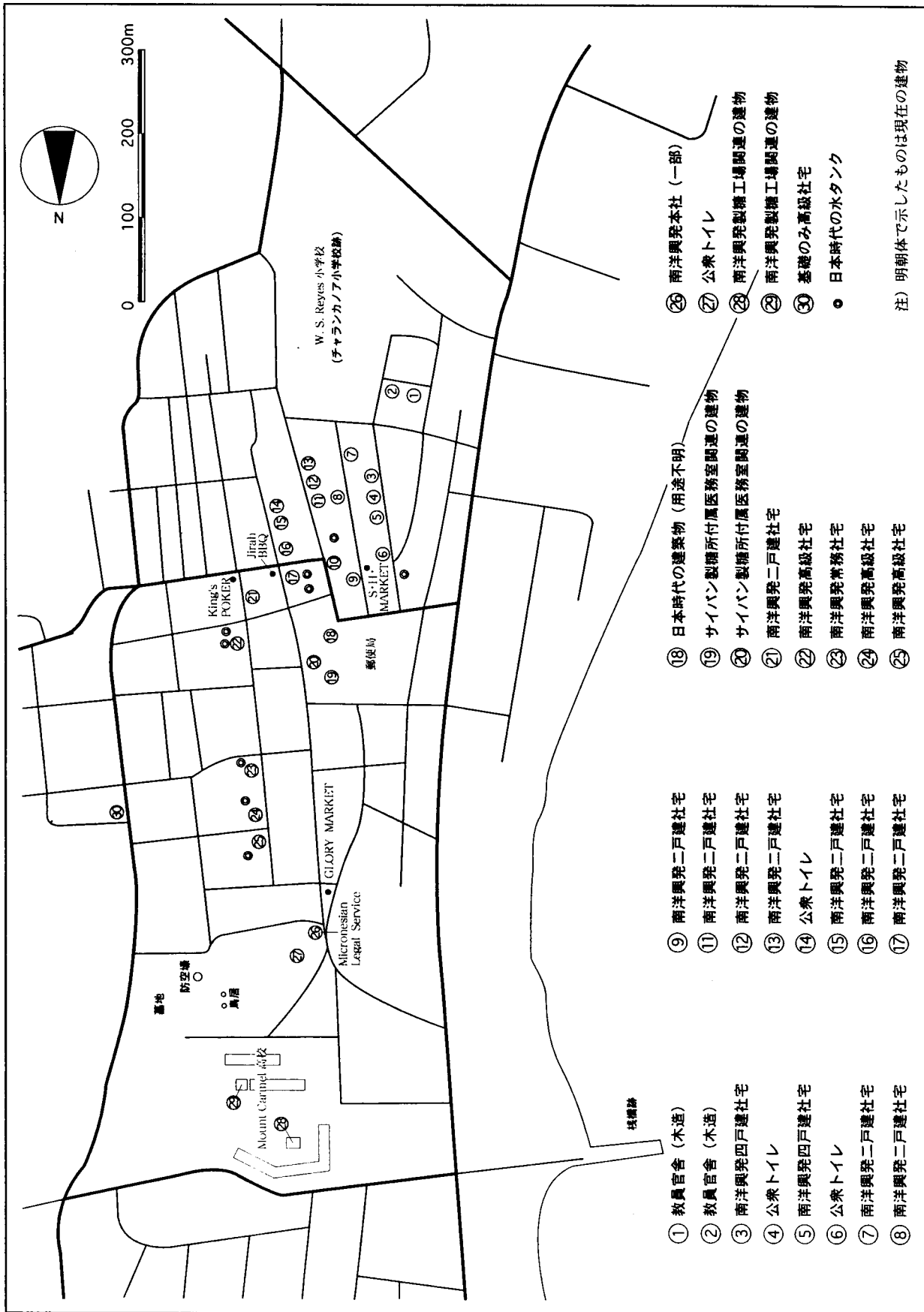


図1 サイパン・チャランカノアに残る日本委任統治時代の建築物

四戸建設計圖』（両者とも原版は変形A2判。）の平面図を写し取ったものもあわせて示す。これらの図面と実測図では、間取りや細部の寸法はほぼ同じであった。しかし『設計圖』では全て木造で示されていたが、実測したものは壁式鉄筋コンクリート構造に木造の屋根を架けた構造であった。これには、チャランカノアが南洋興発の拠点であり、対外的なアピールの意味もあったと考えられる。なお、これらの社宅の建設年代などに関する資料は現在のところ未見であり、今後の検討課題である。

4. まとめ

本報では、現地調査の結果を基に、北マリアナ諸島サイパン島チャランカノア地区における日本委任統治時代の

の建築物の残存状況を報告し、南洋興発の幾つかの社宅の実測結果を示した。しかし検討すべき課題が数多く残っており、今後、さらに研究を進めていく必要がある。

謝辞：現地調査では、北マリアナ諸島政府社会文化省歴史保存局副歴史保存官の Lon Bulgrin 氏ほかスタッフの皆様にご協力頂いた。資料収集ではアジア・太平洋資料室の山口洋児室長に、情報収集では太平洋学会の中島洋専務理事にご助力頂いた。本報の一部は、平成13～14年度科学研究費補助金（奨励研究（A）、若手研究（B）、課題番号13750557）と平成13年度（第39回）三島海雲記念財団学術奨励金によった。記して謝意を表す。

<脚注>

注1）本研究全体の枠組みの詳細は、本報と同タイトルの「その1」（建築学会九州支部研究報告、第40号・2、pp.129～132、2001.3）を参照。

注2）これらの図面中には、南洋興発の社宅である旨は記載されていない

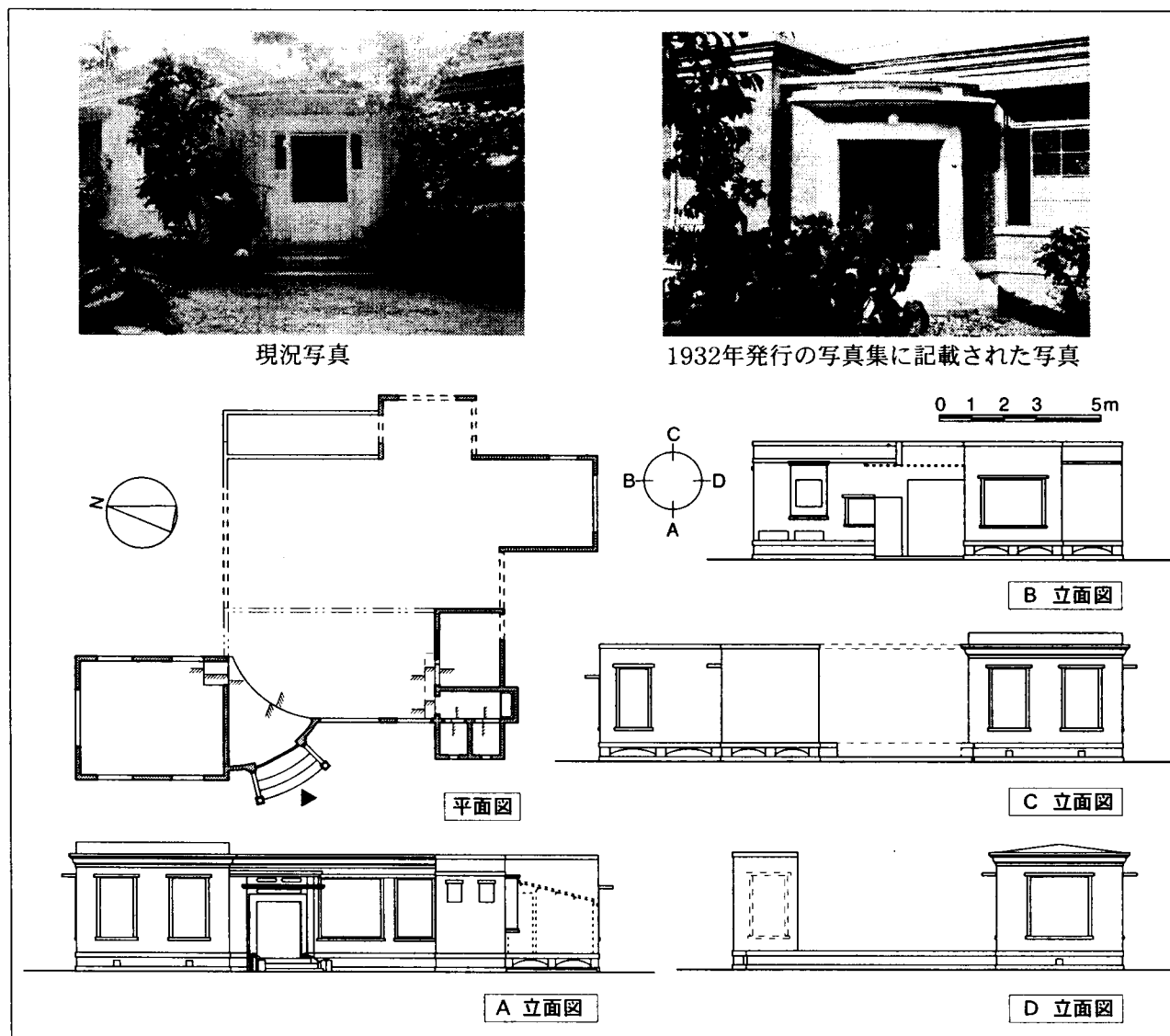


図2 旧南洋興発常務社宅の現況平面図，立面図ならびに写真

が、南洋庁官舎の図面と一緒にまとめられていたものを入手したとのこと、今回は報告していないが一連の図面と間取りや細部の寸法がほぼ同じ社宅があったこと（図1中の㊸）から、南洋興発の社宅の図面であることはほぼ間違いないと考えられる。

<参考文献>

- 1) 戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その2, 建築学会九州支部研究報告, 第40号・3, pp.633~636, 2001.3
- 2) 同上タイトル その4, 同上, 第41号・3, pp.417~420, 2002.3
- 3) 同上タイトル その5, 同上, 第41号・3, pp.421~424, 2002.3
- 4) 同上タイトル その3, 同上, 第41号・3, pp.413~416, 2002.3
- 5) 同上タイトル その7, 建築学会関東支部研究報告集, 第72号, 投稿中, 2003.3
- 6) Keiko ONO, John P. LEA and Tetsuya ANDO: A Study of Urban

Morphology of Japanese Colonial Towns in Nan'yo Gunto Part 1
Garapan, Tinian and Chalan Kanco in the Northern Marianas, J.
Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No.566, 333-339, Jun., 2002

- 7) 南洋廳長官々房: 南洋廳施政十年史, 南洋廳長官々房, pp.46~56, 1932.7
- 8) United States Geological Survey: Topographic Map of the Island of Saipan, United States Geological Survey, 1983
- 9) 小菅輝雄: 復刻版 南洋興発株式会社 興発記念砂糖になるまで, 小菅輝雄, ページ番号なし, 1999.2
- 10) 南洋興發株式会社: 南洋興發株式会社 興發記念砂糖になるまで, 南洋興發株式会社, 1932

*1 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻 講師・博士 (工学)

*2 アトリエ イマージュ

*3 熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻 助手・博士 (工学)

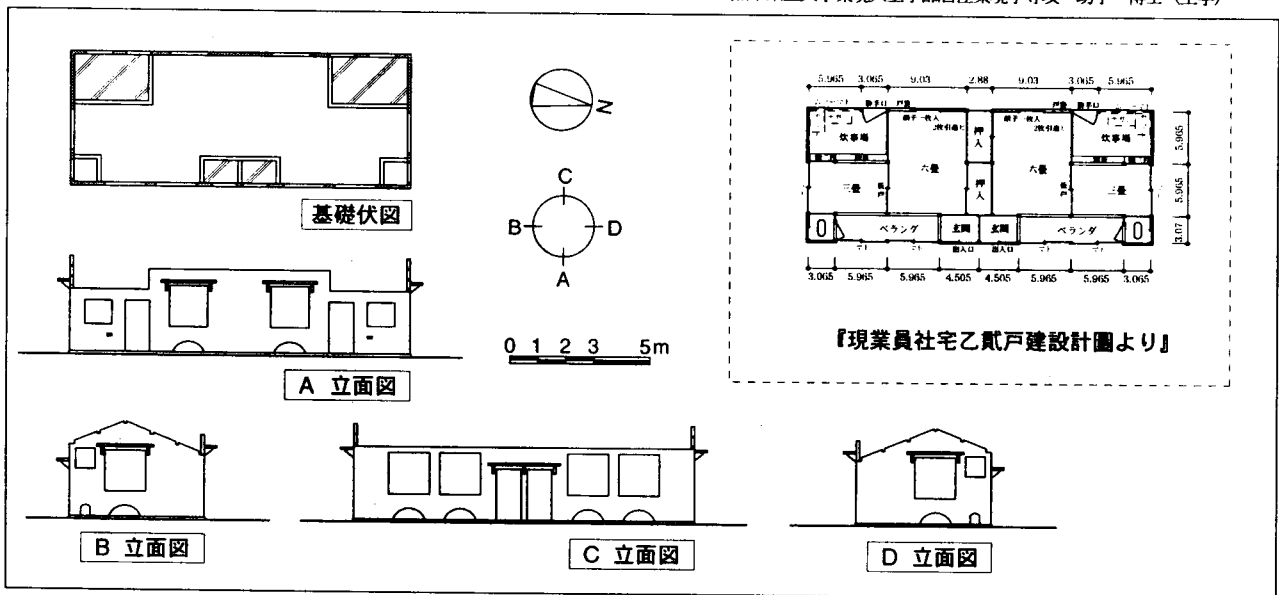


図3 旧南洋興発二戸建社宅の現況平面図と立面図

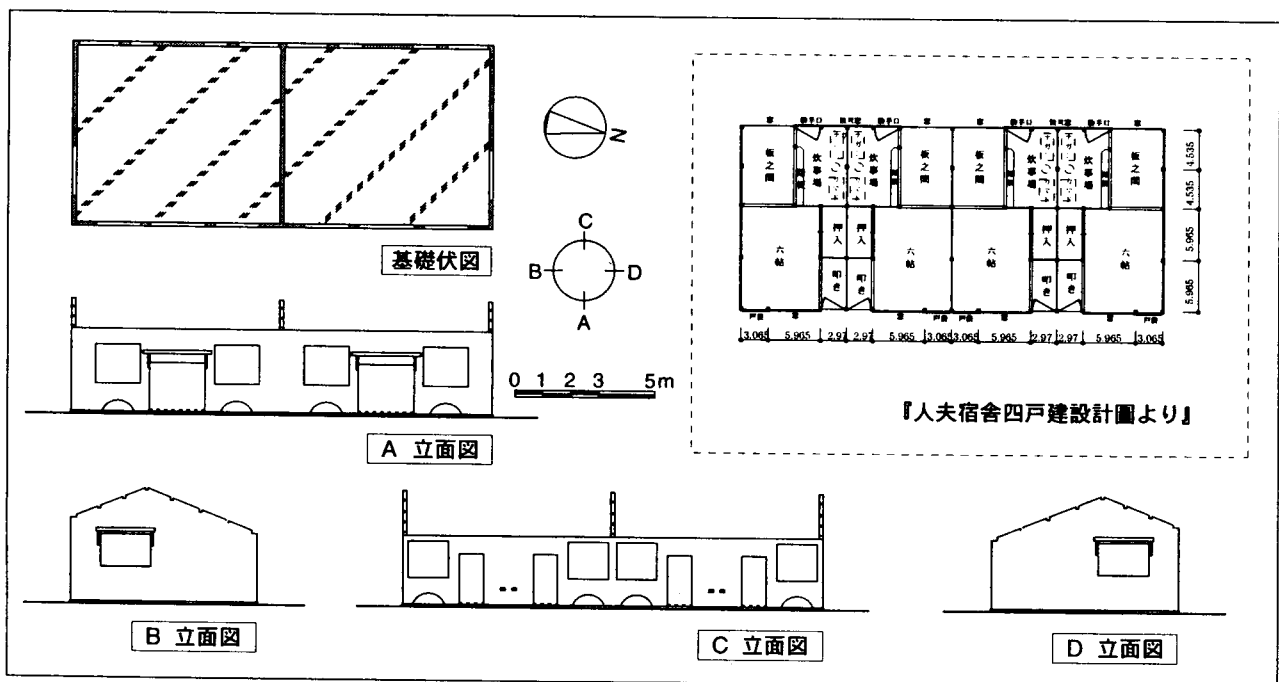


図4 旧南洋興発四戸建社宅の現況平面図と立面図